

# 「郷土の学習」における野外学習の展開事例

加 藤 佳 孝

## 1. はじめに

郷土は地理学の対象とする地域 **Region** の1例であり社会科の教材として取り上げられるべきものの1つである。郷土を教材として取り上げる場合、それが目的概念と方法概念のどちらを考慮して取り上げるにしろそれは郷土の学習と称せられるであろう。その際郷土の諸現象・事項をその目的に応じて系統化したり、分類化したり、単純化したりして教材化しなければならない。また、郷土を対象とする学習は、単に社会科のみならず他教科においても取り上げられるべきだろうし社会科においても、単に地理的分野のみではなく、歴史的分野、政経社的分野でも教材化しうるものであろう。それは指導要領においても、留意事項として地理的分野でなされた郷土の学習にさらに発展的に関連づけ歴史的分野、政経社的分野の学習が行なわれるべきとされている。昭和47年度から実施に移される新指導要領は、中学校1年社会科地理的分野において、5つの目標を達成するため学習の内容として ①身近な地域 ②日本とその諸地域 ③世界とその諸地域 ④世界の中の日本の4つの大項目を設定し、現行指導要領での扱いよりもさらに郷土の学習を重視している感がある。しかし、中学校社会科の地理的分野の学習はあくまでも世界や日本の諸地域の地誌的学習に重点がおかれている。こうした学習体系の中で郷土の学習をどのように全体の中で位置づけるか、生徒にどのように学習させるかということはきわめて重要な問題とされるであろう。例えば、新指導要領の中での4大項目中「身近な地域」にどのような軽重をもたせるか、具体的には年間時間配当の中で何時間を削るか、あるいは「身近な地域」の学習内容としてあげられた ①野外観察と調査 ②地域の特徴と変化 ③他地域との関連の項目を実際の指導ではどう扱うか、即ち、郷土を地理的に学習するというを教師がその指導においてとる基本的姿勢を ①郷土地理、郷土地理学、つまり郷土のあらゆる地理的事象、現象を網羅して、郷土の総合的学習をすることによって郷土を理解させようとするいわゆる郷土地誌とするか、あるいは ②郷土の地理学、つまり郷土の顕著な地理的事象、現象を取り上げ、これを理解させることによって地理的な物の考え方、見方を養成し、その前後に行なわれる日本、世界の地誌的学習をより効果的なものとするか、などが問題点の1例と考えられる。

ここでは、本校の中学1年社会科で1969年度に実施した郷土の学習、具体的には野外学習を中心として展開した郷土の学習を1事例としてあげ、それを今後、中学校社会科地理的分野において、郷土の学習を全体の中でどのように位置づけるか、郷土の学習をより効果的に実践するにはどのような指導計画を立案すべきか、また、特に郷土の学習の中で野外観察、野外学習をどのように計画・実施したらよいかなどを検討するための一端としたい。

## 2. 郷土の学習の指導計画

地理的分野において、郷土の学習の指導計画を立案する際には、まず第1に郷土を総合的に取り上げ郷土地誌として扱うか、郷土の地理学習として扱うかの基本姿勢を考えねばならないだろう。もっともいずれか一方の姿勢のみでは効果的な指導は行なえないだろうし、両者を関連させた柔軟な姿勢をとるべきであろう。実際には多くの現場で郷土の学習は郷土地誌的な扱いをうけ、教室において日本や世界の地誌的学習の1分野として学習されている場合が多いのではないかと。その際、生徒の居住する地域社会、即ち郷土の身近な地理的事象を1・2とりあげ、郷土地誌的学習で生徒に若干の興味と関心を持たせるのみで、効果的な指導として行なっているのではないだろうか。そして年間授業時数や学習内容の多さなどから郷土の学習の配当時数を削減したりして、郷土というきわめて利用価値のある教材を十分に利用せずにいるのが現状ではないだろうか。この点地理担当者としては深く反省してみる必要があると思われる。こうした点を考慮して1969年度において次のような指導計画を立案した。立案に際しては次の点に留意した。まず、郷土地誌的学習と郷土の地理学習という2面を考え①郷土を含む日本の諸地域としての地誌的学習（具体的には、中部地方東海地区の学習）と②野外学習を前提とした郷土の学習という並列した授業展開をとった。これは本校においては、中学1年社会科を教官数、クラス数などから、日本と世界に分けて教官2名で分担していることから、両者の接点として郷土の学習を位置づけたものであり、郷土の学習の部分のみ並列したものではない。また、郷土の学習が終了してから夏季休業に入り、夏休みの課題として郷土の学習を与え、生徒自身に郷土を調査させ、郷土の学習をより効果的に発展させると

いうねらいから、6月下旬に郷土の学習に入るよう教材の配列を考慮した。

以不は郷土の学習の両面の学習計画であるが、地誌

的学習である東海地区の学習は配當時数と簡単な内容であり、野外学習を中心とする郷土の学習は配當時数、授業の内容と展開を具体的に示したものである。

1. 中部地方・東海地区の郷土地誌的学習

主 題	時限	内 容
中部地方の自然	1	1. 中部地方の位置 2. 土地のありさま ・日本アルプス、河川と平野 3. 気 候 ・東海、中央高地、北陸の3区分
中京工業地帯(1)	2	1. 発達の歴史 ・戦争と重工業 ・四大工業地帯の中の地位 2. 繊維工業 ・岡崎、浜松を例とした綿工業 ・一宮、尾西を例とした羊毛工業
中京工業地帯(2)	3	3. 陶磁器工業 ・瀬戸、多治見を例として 4. 重化学工業 ・名古屋市南部の臨海工業地帯 ・四日市を例とした石油化学コンビナート ・東海市を例とした製鉄とその問題 5. 機械工業 ・豊田市を例とした自動車工業
濃尾平野の農業	4	1. 濃尾平野の特色 ・西部の三角州地域の土地利用 ・東部の洪積台地、扇状地地域の土地利用 2. 愛知用水 3. 明治用水 } 目的と実際 4. 豊川用水
東海地方工業と農業	5	1. 駿河沿岸の工業 2. 茶とみかん 3. 気候を利用した農業 ・久能山の石垣いちご ・渥美半島などの草花の栽培
東海地方の漁業	6	1. 遠洋漁業とその根拠地 ・焼津、清水 2. 沿岸漁業 ・伊勢湾の沿岸漁業とその問題点 ・のり養殖………知多湾、渥美湾 ・うなぎの養殖………浜名湖

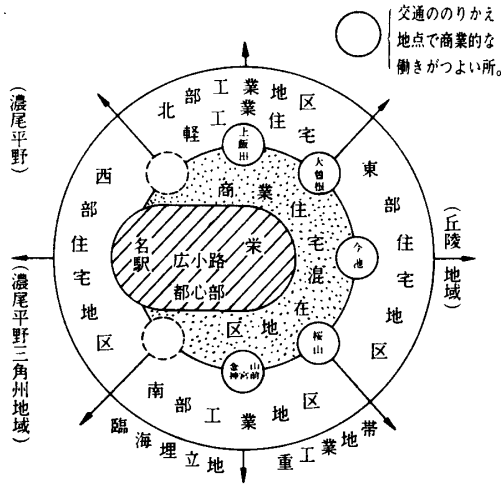
2. 野外学習を前提とする郷土学習の指導計画

主題時限	内容(板書・掲示とある項目以外は、作業帳形式)の小冊子にして配布してある。	展 開
私達の郷土・	1. 中部地方の中の愛知県の地位 ・愛知県の人口、工業出荷額(板書) 2. 愛知県の中の名古屋市の地位 ・名古屋市の人口、工業出荷額(板書)	・別展開の「中部地方」の学習でどんな事がわかったか発表させる。 ・愛知県の中で名古屋市はどんな地位を占めるか→特に人口、工業出荷額で→資料提供(資料「愛知

<p>郷土の範囲</p>	<p>3. 郷土の地域範囲</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・愛知県全図（掲示）</li> <li>・名古屋市とその周辺の地形図（掲示）</li> </ul>	<p>県勢」「工業統計調査報告書」愛知県統計協会)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・私達の郷土はどこだろうか→名古屋市とその都市圏内</li> <li>・生徒の居住地を質問する→市区町村別に挙手させる</li> <li>・郷土の範囲→生活に密接な関係のある範囲→考え方によっては大きくも小さくもなる→名古屋市外から通学する生徒も、名古屋市という大都市とは無関係ではありえない。</li> <li>・郷土は必ずしも行政区域とは一致しない→行政区の境界線付近に住む生徒に質問してみる。</li> </ul>
<p>都市の発達と構造(1)</p>	<p>1. 名古屋市の発展</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・明治の名古屋，明治24年の地形図（略）</li> <li>・大正の名古屋，大正9年の地形図（略）</li> <li>・現在の名古屋，最新の地形図をはりあわせたもの（掲示）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治・大正の地形図で学校や生徒の居住地の位置を確認させる。</li> <li>・地形図の約束，主要な記号について学習する→現在生徒の住む地域が，明治，大正の地形図ではどのような土地利用になっているか調らばさせる。</li> <li>・各時代の市街地のおおよその輪郭を把握させ，都市が拡大してきたようすを地形図で確かめさせる</li> </ul>
<p>都市の発達</p>	<p>1. 都市の発達 (朝倉地理学講座より)</p> <p>〈都市の発達〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市はどのように発達していくか→資料をみながら考えてみよう。</li> </ul>

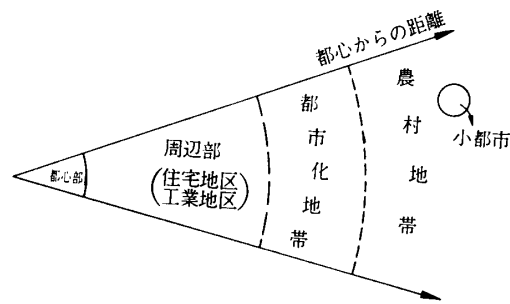
と  
構  
造

2. 都市の構造 二名古屋市を例にして二



- 模式図化した名古屋市の地域区分図で生徒各自の居住地を確認させる→各機能地域の特色を説明
- 都心部, 商業住宅混在地区, 住宅地区, 工業地区のようすを発表させる→模式図の確認→各機能地域は漸移地帯を間に分布することに注意させる→おおよその区分である
- 都市は拡大するにつれ各機能地域に分化することを例に把握させる

3. 都市の構造と周辺町村との関連



- 都心部からの距離に応じて土地利用が変わる→模式図による地域分化と比較してみる。
- 都心部にはどんなものがあるか, なぜにぎやかなのか→
  - { 行政的機能……県庁, 市役所など官庁街
  - { 行務的機能……銀行街, 会社営業所
  - { 商業的機能……デパート, 専門店, 問屋街
- どんな時に栄や名古屋駅付近(名古屋の都心部)へ行くか
- 都市化地帯→何が何に変わっていくか, なぜだろうか→都市化地帯に住む生徒によるすを発表させる。
- 周辺農村地帯
  - { 都市周辺の農村地帯ではどんな農業が行なわれるか
  - { 都市への通勤, 通学, 買物
  - { 都市からどんなものが移ってくるか
- 都市周辺の農村地帯から通学する生徒に発表させる。

三  
好  
町  
の  
概  
況

1. 三好町のあらし二都市周辺の町村の例として二

• 三好町の人口

<人口の増加>

年度	人口
昭和15年	6.833
" 25年	9.321
" 30年	9.007
" 35年	9.161
" 40年	14.438

<産業別人口構成>

年度	第1次産業	第2次産業	第3次産業
30	76.2%	9.3%	14.5%
35	65.3	17.3	17.4
40	46.4	25.4	28.2

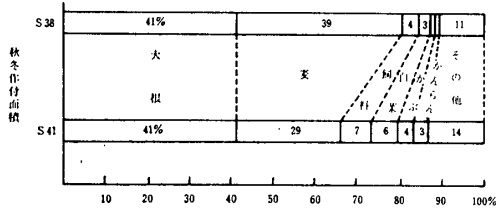
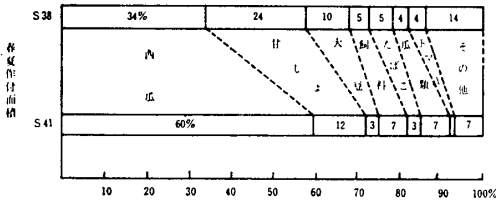
• 三好町周辺の地形図(略)

- 三好町はどんな町だろうか→三好町町勢要覧「みよし」より抜粋「三好町は名古屋市より約15kmほど東にあり, 豊田市との中間に位置している。町は東西3.5km, 南北9kmの細長い形をしており, 中央部はなだらかな丘陵性の台地であるが大部分は開発されて畑になっている。町の東西両端を河川が流れ, その両側はほとんど水田地帯になっている。
- 人口の急増はいつ頃からなぜだと思えるか→昭和35年以後の急増, 第2次産業人口比率の増大
- 三好町の概況→10年前までは純たる農村であったが, 中部圏の発展とともに工場の進出をみ, 同時に農業から他の職業にかわる人もふえ商店などもふえ町のようなすが変わつつある(町勢要覧)→三好町の変化に気づかせ, それが三好町自体の内部的要因のみならず名古屋市, 豊田市などの影響も見逃せない点であることを強調する。

三好町の農業

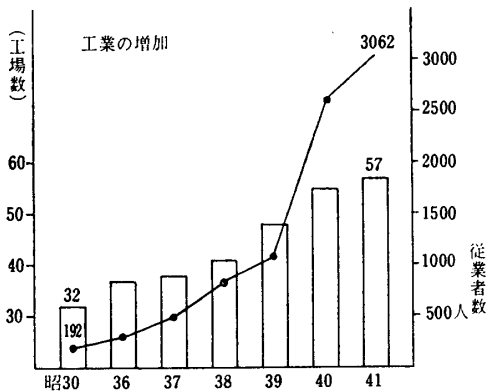
1. 土地利用図
2. 農家の経営形態別分類
3. 農産物の生産状況
4. 愛知用水と三好町の農業

- 三好町の農業はどんな特色があるか→
- どんな作物が多く栽培されているのだろうか→
- 全農家約1400戸のうち農業だけで生活する専業農家は何%ぐらいだろうか→
- 三好町の農業→主として米麦中心の農業であったが最近では果樹、そさい園芸、畜産などがとり入れられている。農家は約1400戸あり、専業農家は42%で残りは兼業農家である。また耕地は約1600haで田が50%、果樹園が27%となっている。
- 愛知用水完成後三好町の農業のやり方は変わったか→どんな作物がふえ、何が減少したか→特にすいかの増加に注意→なぜだろうか



三好町の工業

1. 工業の増加



- なぜ三好町のような農村地帯に工場が立地するようになったのか→一般的な工業の立地条件の検討
- いつ頃から工場が増えはじめたか→
- どんな種類の工業が多いか→内陸工業地帯→原料を多量に必要としないもの、あるいは原料、製品とも軽量のもの→食品、衣服身回品などの業種が多い→立地条件の検討
- どこから進出、移転してきた工場だろうか→「愛知家具工場団地」「名古屋紳士服縫製団地」など名古屋市から集団移転した例に注意させる→なぜだろうか
- 豊田自動車工業の組立工場及び自動車関連産業の存在にも注目させる

2. 工業の種類

区分	事業所数	従業者数
食料品	19	149人
繊維工業	3	169
衣服身回品	10	396
木材同製品	3	18
家具装備品	3	571
化学工業	2	188
非鉄金属	1	30
窯業土石製品	3	1,086
金属製品	5	153
機械	1	42
電気機器	1	35
輸送機器	4	123
その他	2	102
合計	57	3,061

• 三好町では昭和35年工場誘致奨励条例をつくって積極的に工場の進出をはかった。その結果次のような工場が進出してきた。

- |           |          |     |            |               |
|-----------|----------|-----|------------|---------------|
| (昭和36年)   |          |     |            |               |
| 1. 富士道木工  | 家具製造     | 31人 | 3. 藤和ライト工業 | 合成樹脂加工 20人    |
| 2. 藤井容器工業 | ブリキのかん製造 | 32人 | 4. ナカノ家具工業 | 家具製造 41人      |
|           |          |     | 5. 矢田金属工業  | ネームプレート製造 58人 |

6.	フジ自動車工業	自動車修理	33人	5.	名古屋紳士服縫製団地	既製服製造	510人
7.	村上製作所	機械部品製造	48人	6.	愛知家具工場団地	家具製造	504人
8.	青木金属	金属精錬	30人		(昭和39年)		
9.	関西ペイント	塗料製造	146人	1.	東京製パン	パン製造	40人
10.	三和金属製作所	機械部品製造	70人	2.	アース製菓	製菓	33人
	(昭和37年)			3.	浅野段ボール	段ボール	60人
1.	菊乃世広瀬酒造	醸造	42人	4.	富士家具	家具製造	98人
2.	瀬戸陶器	陶磁器製造	92人		(昭和40年)		
3.	桜織維	紡績	187人	1.	名古屋塗料	塗料製造	127人
	(昭和38年)				(昭和41年)		
1.	日本陶器	陶磁器製造	857人	1.	トヨタ自動車工業	自動車組立	3000人
2.	東洋ゴム	発泡樹製造	72人		(昭和42年)		
3.	日本コーテットアプレシブ研磨紙製造	100人	1.	内浜工業	自動車部品	73人	
4.	愛知県製粉工業協同組合	食品加工	48人	2.	トヨタ自動車工業	自動車組立	2000人
ま	1.	名古屋市を例として都市の発展と構造、地域分化					
と	2.	名古屋市を例として、都市と周辺農村地帯と関連					
め	3.	三好町の概況					

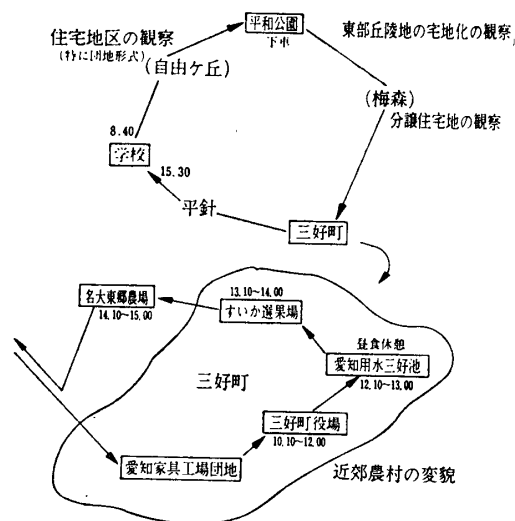
### 3. 野外学習の実践

#### 1. 野外学習の形態と field の選定

野外学習の field 選定に際して考えなければならないことは、第1に郷土という1地域内で学校や生徒の居住地がどのような所に位置するか、また生徒がどのような生活環境を有しているかであり、第2に野外学習をどのような形態で実施するかということである。即ち徒歩で、または公共交通機関を利用して、あるいは貸切バスでかの別、また1時間の授業時間内、あるいは半日、1日を費いやすか、これらの組合せが問題になるのである。そして第2点については、学校の教育活動、具体的には教科活動や学校行事などの中で郷土の学習の中の野外学習がどう位置づけられるかということでもある。こうした諸点を考慮して具体的な野外学習の形態や field を決定、選定すべきであろう。

本校は名古屋市の東部丘陵の住宅地区に位置し、野外学習の対象である中学1年生は若干名を除いて大部分が市内に居住し、その分布も市内全域にわたっている。そしてほとんどが都市的生活環境を有しており、第1次産業に関しては知識として存在しても体験的認識はきわめて乏しいし、また第2・3次産業に関しても同じである。こうした状況から野外学習の field を名古屋市の東部丘陵地帯からさらに東の都市化地帯と名古屋市の影響を強く受け変貌の激しい農村地帯の三好町に設定した。また、野外学習の形態もより効果的というねらいからバスを利用し、1日6時間分を1日1クラスずつ2日に分けて実施した。

#### 2. 野外学習のルートと学習のねらい



#### 3. ルートと学習項目

野外学習のための教室での学習内容を車中より観察・確認、あるいは下車し見学・聞き取り調査するために前もって配布してある作業帳形式の小冊子には次のような学習項目を掲載しておいた。

- ① 学校～自由ヶ丘～平和公園 (車中観察 教官説明, 平和公園下車, 教官説明)
  - この地域は名古屋市の中ではどのような地域か
  - 平和公園からはどんなもの、どんなようすがみえるか
- ② 平和公園～梅森～三好町 (車中観察, 教官説明)
  - 星ヶ丘付近の観察
  - 梅森付近の観察 一自由ヶ丘付近とくらべる
- ③ 愛知家具工場団地 (下車, 見学, 聞き取り)
  - 工場団地とはどんなものか
  - なぜ三好町にできたか

## 「郷土の学習」における野外学習の展開事例

- どんなことが問題になっているか
- その他各自が質問したこと
- ④ 三好町役場（下車，説明，聞き取り）
  - 三好町はどんな町か 一過去，現在，将来一
  - 三好町と名古屋市の関連
  - その他各自質問したこと
- ⑤ すいかの選果場（下車，見学，聞き取り）
  - どんなことをしているか
  - 主にどこへ出荷されているか
  - その他各自が質問したこと
- ⑥ 名大農学部東郷農場（下車，見学，聞き取り）
  - なにをすところか
  - 農場の広さ，どんな設備，施設があるか
  - かんがいの仕方→スプリンクラーとはどんなものか
  - その他各自が質問したこと
- ⑦ 三好町～学校（車中観察，教官説明）
  - 平針付近はなぜ交通マヒをおこすか→星ヶ丘付近とくらべてみよう
  - 八事付近の観察
  - 名古屋大学付近は名古屋市中ではどのような地域か（機能を考えてみよう）

これら学習項目は，事前に教室で行なわれた学習のまとめ的なものであり，授業では決論を出さずにおいた点も含まれている。また，下車見学地については，事前に連絡し，これらの点について説明してもらうよう，あるいは，こんな質問が生徒から行なわれるということを事前にお願ひしておいた。

### 4. 事後指導と評価

郷土の学習を教科書にそった中部地方東海地区の郷土地誌的学習と野外学習を前提とした郷土の学習のまとめとして1日の野外学習を実施したのであるが，郷土の学習そのものが生徒の郷土に対する概念的知識と体験的知識が一体化されたかの評価は今後の検討に待つほかはないのであるが，1日の野外学習とその準備のための学習による経験が今後の学習に十分反映させていくような事後指導が重要になる。こうした観点から事後指導としては，作業帳形式の小冊子「郷土の学習」の中の学習項目を整理させ，野外学習の感想文も書かせ提出させた。そして郷土の学習の最終時に「数時間の授業と1日の野外学習で十分郷土について知り得たとはいえない。私達は日常生活の中の色々な場所でまた機会に郷土や自分の身のまわりに起る変化や問題などについて絶えず注意しなければならない。さらには諸君が地域社会の一員としてそれらの変化や問題とどう関係があるのかなどを考えて行かねばならない」ことをいい，野外学習はそのほんの1例であったのであるから，「夏休みには自分の住む地域について

どんな地域か，どんな問題があるのかを，学校でやった郷土の学習を例に調らべてみよう」ということで結んだ。

2学期始めに提出されたものをみると，ほとんどが自分の住む市区町村について実際に関係官庁などに出かけ聞き取り調査したものであった。中には公害問題や交通問題などについて県庁まで聞き取り調査に行った生徒もいたし，区の史跡をたんねんにまわり数日を費いやして写真をとったり，関係者の聞き取りをして歴史的分野への発展に興味をしめす生徒もいた。こうした点は十分評価されるべきだろう。また，生徒のこうした態度は今後の社会科のみならず他教科の学習へも十分反映するだろうし，学習の主体性が自分にあることを気づかせた点も評価の対象とされるべきだろう。

### 5. 問題点

生徒の日常生活の場である地域社会が地域的に機能し，地域外とも具体的な流通機構を調じて統一化されているということを体験的に認識させるために，郷土の学習に視点をおきつつ特定の field を選定し，野外学習を展開したのであるが，ねらいはともあれ結果においては種々の問題点を指摘しうるし，また，反省すべき点も多かった。実施に伴う問題としては，指導計画の立案，見学地の管轄への依頼と事前打合せ，コースの安全性確認のための道路事情の調査，しおりの作成など担当者の準備に要する労力の多さがまずあげられる。また1日の授業全部を野外学習に費やすため，他教科，時間割担当者に与える影響も十分配慮しなければならなかった。さらに生徒の側からみれば，第1に中学1年の1学期の段階で前述の指導計画に示した内容を十分に理解しえたかということであり，ただ単に知識としてのみつめこんだのではないかと反省であり従ってもう少し学習内容を重点的しぼった方がよかったのではないかとということである。関連して第2は数時間の準備を経ての実施であったが，そのねらいや意味を十分とらえていたかということである。第3は1日の学習量として，走行距離約50km，下車見学地が4ヶ所は多すぎたのではなかったかである。これらの諸点については今後十分な検討を加えて行きたい。

### 4. おわりに

以上は，今年度本校において実施した。郷土の学習における野外学習の実践例であり，これをもとに，今後地理的分野における郷土の学習の位置づけ，さらに野外学習の形態や，field をどう設定して行くか，また各所の field での実施を試み，これらのあるべき姿や，郷土をいかに教材化していくかを検討して行きたい。